

耳が遠くなったので、この頃の入沢ヨシには、いろいろなことが突然おこる。

昨日もそうだった。六畳の居間にすわって、六つで亡くなった長女の和子の写真をアルバムから剥がそうとしていると、いきなり畳の下がゴトゴト鳴り、その響きが身体に伝わってきた。これには驚いて、庭先に出てみると男の子たちが、いく人かかってに入りこんでいて、竹竿を濡れ縁の下に押し込んでその奥に住んでいる猫を脅していた。

「何よ。あんたたち」

突然声をかけてやると、びっくりしたひとりがいった。

「あ、ばあさん、いた」

「いたわよ」

ばあさんといわれて、気をわるくしたヨシは、声をはりあげていった。

「いきなりひとの家の縁の下を、何よ」

「わー、いた」

もう一人の子が、別の子にいった。

「おまえ、<ばあさんいねえぞ>っていったのに。偵察で、どこ見てた」

「それが、急に出た」

驚いた声で、問われたこどもはいった。

「うー。いた」

それからかれらは、いっせいに逃げだしていき、やがてだれもいなくなった庭だけが残った。

庭といっても、単なる狭い空地である。ヨシが、十年ほど前に植えたキンカンの木が、ヒョロヒョロと立っているのと、住み着く前からあったマキの木が、太れもしないで、その時のままの、上をぶち切られたような姿で片隅に茂っているだけだ。とてもここが、湘南・葉山の一隅とは思われない。

一番下の枝の股のところ、皮が擦り剥けているのは、次男の康夫が小学生のころ、紐を掛けてぶらさがったり、それをたよりに上にのぼったりしたからである。

それをみつめながらヨシは、ドンドン地響きがするまでこどもたちの行動に気がつかなかったのは、耳の衰えが進んだということなのかどうか、考えた。

前にも幾度か、そういうことがあったような気がする。

たとえばあれは、もうだいぶ前、ロサンゼルスでオリンピックがひらかれていたころのことだった。

その時ヨシは、テレビが日本の男子体操チームの演技を映しているのを、熱心に見ていた。若い男の、鍛えられた肉体が動くのは、やはりひきつけられる。だれにもいわなかったが、ヨシはだいぶ前から、おおざっぱな採点ができるぐらいの体操競技のファンである。

お気に入りの脚のきれいな選手が背面車輪にはいって、思わず身を乗り出したとき、突然、庭に面したガラス戸があく音がした。いきなり開けるなんて、不作法である。ふりむくと、丸い女の顔があって、こっちを見つめている。

「あら、君枝ちゃん」

ヨシは、びっくりしていった。君枝は隣家の女であるが、この前に遊びにきたのは、十年以上も前のことである。そんな者に男の体操に夢中になっているところを見られて、すこしきまりが悪い。

しかし君枝は、そんな気配を問題にしなかった。

「玄関で呼んだんですけれど、いくら呼んでも返事がないもので、こっちへ来てみたの」

「ごめんなさい。気がつかなくて」

相手の顔を見ながら、ヨシは言い足した。

「あがってちょうだい。今、お茶入れるから」

「いえ。いいんです。わたしすぐ帰るから」

その声はこわばっている。何か思い詰めて来たという雰囲気である。はて、と思った。独身の女の抱えている問題といえば、まず男がらみだと、ヨシはいつも思っている。今度は黙って、相手を見直した。私立探偵が彼女の素行調査に、ここへやってくるからよろしく頼む、というような話かもしれない。

そのときの君枝は、四十にはあといくつ、というところだったが、けっこう若く見える。玉の輿ということだって、まだあるかもしれない。

「なにかしら。どうぞ、おっしゃって」

ヨシは、ニコニコしながらいった。

「あのですねえ」

君枝はいった。

「このあいだ、おぼさんのところで、玄関ホールの壁紙を代えたでしょう」

「ああ、あれ。代えたわ。ごらんになる？」

「いえ。いいんです」

君枝は首を横に振った。

「もう、知ってますから。そのことなんですけれど、実はわたし、とても困るんです」

「は」

「だって、うちのダイニングと同じなんですもの」

「・・・・・・」

「そうなの」

「あれは、堀内の加東さんに張ってもらったものなんだけれど、たしか新しい製品だとか、いっていたわ」

「うちの仕事も加東さんなの。加東さんて、わたしあんまり好きじゃなくて気が進まなかったんだけど、この辺じゃあそこしかなくて、しょうがないでしょう。まったく無神経で、新製品新製品で、みんな使うんだから。恥ずかしくて、どうにもなりやしない」

君枝は、口速にそういうと、ふつつりと黙った。ヨシは、相手の様子をうかがう。君枝は真剣に怒っている。

君枝の家にあがったことはない。だから、なかがどうなっているかはわからないが、ヨシの家の玄関ホールは、ホールとは名ばかりで、半畳の玄関に一畳程度の板の間がついているだけである。壁はベニヤ板で、ペカペカしているので、壁紙を張ってごまかしている。それがこの間の豪雨で雨漏りがして、茶色の縞模様ができてしまった。それで、とりかえたのである。

「ですから、困るんです」

君枝は繰り返していった。

「困るって・・・・」

「ええ。お宅がなんとかして下さい」

ヨシは、相手のいったことが、よくわからなかった。

「だって、そうじゃありませんか」

君枝は、苛立ちを声ににじませながらいった。

「こういうときは、どっちが先だったかということが問題だ、と思います。それでいうと、うちのほうが先なんですね。ですから、お宅がなんとかして下さい」

やっと、ヨシはいった。

「でも、うちは、おたくのダイニングといっしょでも、ちっともかまいませんから」

「おたくは、かまわなくても、わたしは、困るんです」

君枝はいった。

「そんなことって、耐えられない。加東さんも加東さんだわ。そのくらいのこと、気を遣うべきよ」

「加東さんがやって下さるといふなら、直してもいいですわよ」

ヨシは、いった。

「でも、お金は出しませんよ。うちのほうは、このままでいっこうにかまわないんですから」

君枝は、そう言い放ったヨシを、おや、というまなざしでみつめた。ふたりは、しばらく黙ってお互いの様子を探りあった。

「そうですか」

やがて、君枝はいった。

「じゃ、わたし、これから行ってくる」

君枝はほんとうに茶の一杯も飲まずに、席をたった。ヨシは、そのうしろすがたを見送りながら、それにしても、君枝はいったい何時、ヨシの家の玄関ホールを見たのだろうと思った。そして、しばらく口を利かなかったので印象が薄れていたが、もともと、あつかいにくい人だった、と昔のあれこれを思い出した。

壁紙の件は、君枝がそれっきり姿を現さなかったので、どうなったか、ヨシにはわからない。とにかく壁紙はそのままである。

隣人と一口にいても、いろんなひとがいる。ヨシは、引っ越してきたばかりのころ、安原ゆき・君枝という表札の出ている家に挨拶にいったこともあった。中年女性のゆきの丁寧な物腰は悪い印象ではなかったと記憶している。道で出会っても、品のいい態度で言葉を交わす。しかし、何故かうちとけられない、という感じがこころのなかで育ってきた。これはなんだろう。数年たった或る日、ヨシは気づいた。ゆきの家にも一度も上がったことがない。

それから安原家から、関心はだんだん去っていった。べつに特におもしろそうな家でもない。あのひとたちは、あまり人と付き合うのが好きではないのだから、そっとしておこうと思ったのである。

しかし、すぐにそうできたわけではなかった。

ヨシが、この住宅地に住むようになってもう二十年になる。

葉山というと、「いいところに」お住まいですね」と必ずいわれるから、「ええ、まあ」と答えて、相手を大いに羨しがらせることにしているが、実際はそれどころではない。ここは、戦後まもなく建てられた小さな古い家がたてこんでいるあたりである。もちろん粗末な資材を使ったものだから、もうかなりの傷みがきている。

二十年たつと隣人たちのようすも、変わる。ヨシがまだ元気だった夫と一緒に引っ越してきたときには、右隣は関内の役所に通っていた中年の頭の薄い男が住んでいた。子供の多い動物ずきの大家族で、サルや土佐犬を飼っていて、いつも賑やかだった。今はその男は死んで、当時は中学生だった少年が、主人になっている。サルはもういないが紀州犬がいるし、やはり頭が薄いので、ときどき、前の主人と混同していること

があるけれど、そのときは『ほら、もう、二十年たったんだから』と自分にいい聞かせる。

しかし、左隣の安原ゆき・君枝の家は、いつも静かだった。

引っ越してきたころの娘の君枝は、年の頃は二十を過ぎたばかりで、小柄で丸顔の美人だった。みなりは最新流行のファッションで、毎朝横須賀中央のデパートへ店員として通勤している。

母親のほうは、年相応に肥満していた。毎朝娘の君枝が出掛けるときは、玄関に立って見送る。そのときは、服装にあれこれと手をやって、直してやったりする。娘のほうは、うるさがりもしないでされるがままになっていた。

この人は早起きで、まだうすぐらいうちに家のまわりの道を竹箒で、きちんと掃く。台所にもあかりがつく。

隣組の回覧板をまわしていくときとか、そういうときに顔を合わせるが、「わざわざどうもおそれいます」と必ず言って深く頭を下げてくれる。

夜は十一時前に明りが消えた。いつもそこだけ沈みこんでいるような家だった。

しかし、二十のころの君枝は、透きとおるようにかがやく肌をしていた。若い売り子のなみいるデパートでも、さぞかし目立ったことだろう。

「君枝ちゃんて、彼氏いるかなあ」

長男の裕司が、嘆声といっしょにこういったとき、ヨシは思わずドキッとした。そのころの裕司は、地元の私立高校を卒業して、横須賀の米軍キャンプに出入りしている洗濯屋へ行って働いていた。英語があるので高校出が望まれたし、当人は英語の実践的な力をつけて、やがてはアメリカで一旗あげるという計画を持っていたからである。

その裕司が、ときどき垣根越しに、隣家に熱っぽい視線を注いでいるのに、ヨシは気づいていた。あれだけの美人である。裕司だって気になるだろう。

あまり賛成ではなかった。美人を鼻にかけているのが気に食わない。身につけているものも、はやりのもので隙がなく、うちの嫁として来てもらっても、汚れものをあつかわせるのは遠慮しなければならぬような気がする。

裕司は不器用だ、女をくどけるような子ではない、とヨシは考えた。だいいち、こっちは洗濯屋の小僧だし、あちらさんは、男はよりどりみどりである。

ところがある日、ひょいと見ると、低い垣根を間にはさんで、ふたりが口を利きあっていた。ヨシは、思わず手で口をおさえた。声を出しそうになったからである。

ふたりが、いっしょに横浜へ映画をみにいったのは、その週のおわりの休日のことである。

「おれ、君枝ちゃんと、映画に行ってくる。母ちゃん、晩めしは要らんからね」

と、裕司は妙に力んだ声でいって出ていった。だれにも何もいわさないという態度である。ヨシはそれを見送りながら、さてこれはどういうことになるのかと思ったが、裕司が帰ってくるまでずっと心配だった。

しかし、なかなか帰ってこない。ヨシは隣家の明りを気にして時々見た。先様の母親はもっと心配だろうか。おたがい気を揉んで待っている。結婚したら隣が実家で、夫婦喧嘩をすると筒抜けになってしまう。先様の母親は辛いだろうが、わたしじゃない。だから、そんなことはどうでもいい。

馬鹿なことを考えているうちに夜も更け、やがて隣家のドアが開く音がした。帰ってきた!呼吸を落ち着けていると、台所の戸がゆっくり開いて、嘘のようにおとなしくなった裕司が入ってきた。その瞬間、ヨシは、ほっとした。うまいかなかったのだ。

黙って迎え入れたが、裕司は弟と共有の二段ベッドの上でころがりこんだきり、何にも

いかなかった。

「君枝さん、どうだった」

とうとうたまりかねて、尋ねると、うるさそうにいった。

「べつに」

「映画見たの」

「見た」

「楽しかった？」

すると、裕司は薄ら笑いを浮かべていった。

「そりゃあ、映画のこと?デートのこと？」

それから、どういうやりとりをしたのか、ヨシは忘れてしまったが、それはつまるところ、裕司がはぐらかすような返事しかなかったということである。

ふたりのデートは、一回だけで終わり、二度とそういうことはなかった。

裕司は、それからまもなく米軍キャンプのなかで働いていた娘となかよくなって、結婚した。アメリカへ行くという夢は、結婚とこども（四人もできた）のためになかよくなかったが、今は嫁の故郷である沖縄にいて店を持ち、やはり米軍関係の仕事をしている。このごろは、手紙もほとんど来ない。

あのとき、裕司は何もいわなかった。が、きっと君枝に馬鹿にされたのだ、とヨシは思うようになった。君枝は、大学出のサラリーマンが、自分にふさわしいと思っていたから、裕司は軽くあしらわれたのだ。なんていやな女だろう。

一方君枝のほうは、毎日、横須賀のデパートへ通っていた。行きも帰りも何時も同じで、嫁入り前の娘としては模範的である。ヨシは、きっと要領よくいいところに嫁に行くだろうと思った。

そういう生活が続いた。早朝母親は、竹箒で家のまわりの道を掃き、娘を玄関先で見送った。裕司が結婚してヨシの家をでて衣笠に住居を持ち、つぎつぎにこどもをもうけているあいだ、彼女はハンコで押したような毎日を送っていた。ある日、ヨシの夫が勤務先で、脳内出血でたおれ、そのまま死んだときには、線香をあげにきてくれた。四十九日がすぎ、一周忌がすぎた。ヨシはきちんと法事をした。夫は親譲りの資産を、すべて自社の株にしていたが、これが馬鹿にならなかった。

裕司が大家族を引き連れて沖縄へいったとき、やはり君枝はデパートの店員だった。既に三十を過ぎていた。このころからヨシは、はてな、と思った。君枝は何時けっこんするのだろうか。

近所の奥さん方に、それとなく話題として君枝を出してみたこともある。しかし、安原家はどの家とも交際らしい事はしていないので、だれも事情は知らないのだった。

もしかすると、君枝は結婚しないのか。ヨシが、そう思いはじめたころ、変化が起こった。ある晩、何気なく隣家のほうを見ていると、真っ暗だった部屋に突然明りがついた。そのとき見えたのは、とても背の高い人間のシルエットが電灯をつけている姿である。身体は、またしゃがんだのかすぐに消えたが、ヨシは、はっとした。

安原家の二人の女性は、あんなに背が高くない。それに、その人間は、どうやら上半身が裸だったように思われた。

ヨシは、あの人間はしゃがんでから、何をしたのか、電灯をつける前には、何をしていたのか、と思うと、息が苦しくなるような気がした。そしてやはりその気持は、見当外れというわけではなかった。まもなく、色の浅黒い背の高い男が、隣家の屋根に上がってテレビのアンテナを直していたり、濡れ縁の上に長くなって日向ぼっこの居眠りをしている姿が認められるようになったのである。

「君枝ちゃんは結婚したのかねえ」

ヨシは、近所の奥さん連中に尋ねてみたが、結婚式に招待されたというものは、ひとりもいなかった。しかし、なかにはヨシよりも耳ざとい者もいて、それによると男は、秋田の岩手との県さかいから出てきた、上大岡の花屋だとのことである。それを聞いて、ヨシは安堵した。洗濯屋とそれほど違うとは思われなかったからだ。それで、君枝も身を固めてよかった、と思うことができた。

しかし、それも長いことではなかった。ヨシが気づいたときにはもう男はいなかった。身体こそ大きかったが、おとなしい男だったから、何時からいなくなったのか、見当もつかない。すうっといなくなったという感じだった。

縁の下の猫をいじめるこどもたちが、逃げ出してからしばらくたった雨上がりの日のことである。ヨシは庭に布団を出して日に干した。

ヨシは、次男の康夫のことを思い出していた。康夫は、よく干した布団の匂いに、くるまれて寝るのが好きである。〈冬じゅうこのお天気じゃあ、布団なんか干せやあしない。焼酎のんで湿った布団のなかにもぐりこんでる。葉山からみると嘘みたいです〉というのは雪ふかい日本海ぞいの都会で、高校の体育の教師をしている康夫からの昔の手紙である。

高校時代の康夫は、バレーボールの選手だったが、力を試したくて体育大学へ行き、全日本の候補選手までいった。神奈川県に就職するはずだったが意外なことに採用にならず、万一を思って受けておいた方に行くことになったのである。

しかし、天性明るいものを持っている康夫は、いつまでも泣き言をいってはいなかった。じきに〈ぼくに向いたいい子を見つけました。県体協の事務をしている人ですが、とてもしっかりしていてまめな女性です。母さんに見てもらえば、きっと気にいってもらえると、楽しみにしています〉という手紙が来た。

どうせ、うちのこどもたちは、わたしの意向なんか無視して勝手にやっちゃうんだから、と読み終わったヨシは思ったが、その通り康夫は、その手紙ひとつでもう親の許しが出たという気持ちになったのか、次からは〈ぼくのすばらしいフィアンセはですねえ〉という調子になった。今はまだこどもはいないので、共働きをしているが、康夫は県チームのコーチもおおせつかってはりきっているから、結婚してから葉山へは一度も来ていない。

まあ、元気でいるんだからいいじゃないか、とぼんやり低い垣根のそばに立っていると、突然、呼びかけられた。

「おばさん」

振り返ると、そこに君枝がいて、まぶたのへりが薄赤い目でこっちを見ている。

「あら、こんにちわ。今日はお休み？」

ヨシがそういうと、君枝は、返事をしない。ヨシは不安になっていった。

「それにしても、いい日になったわ。家の中にいるのがもったいないみたい」

すると、緊張した君枝の顔がほぐれ、微かな笑いが浮かんだ。なぜ笑うのだろうか。ヨシが、見ているのが辛くなって視線をそらすと、君枝はいった。

「ほら、おばさん。これ」

同時に君枝は、すっと腕をこっちにのぼした。近づいてきた指先には、白いものがひっかかっている。ヨシは、よく見ようとして頭を近づけた。一筋の糸屑である。

その指先を、今度は唇へもっていき口を細くつぼめて吹いた。糸屑は乱れ踊りながら舞い上がり、低い垣根を越えてヨシの庭に落ちた。

「わかります？おばさん」

おもしろくてたまらない、というように君枝はいった。

「さあ、なんでしょう」

「教えてあげましょうか。これ、さっきおぼさんの布団からとれてね、わたしの家の庭に侵入して来たずうずうしい糸屑なの。だから今お帰りいただいたところ」

「そうだったの」

こみあげてくるものを押さえて、ヨシはやっといった。君枝は大腿に歩き去っていった。

なんていやな根性をしている女なんだろう。裕司は、結婚できなかったために、沖縄までいくことになったけれど、そのほうがはるかによかった。君枝なんか、消えてなくなれ。

ヨシは、今度はほんとうに腹を立てた。二度とあんな女と口を利くものか。

そかし、実際の展開はそういうことを許さなかった。糸屑の事件が起こった三日あと、安原ゆきが亡くなったからである。

ゆきは、若い頃から腎臓が悪くて、もうだいぶまえから透析を受けていた。毎朝きちんと掃除をしている姿が、しゃんとしていたので、ヨシは健康そのものと思ひ込み、羨ましがっていたのだったが、そういうことではなかったらしい。この数日は、危篤状態に陥っていたという。

ヨシは、通夜の晩、二十年目にしてはじめて安原の家へあがって、例の壁紙の模様を確かめたり、外と同じように家の中もきちんと手入れされているのを知ったりしたが、この病気の情報も、そのとき大きな鯨桶のまえに座っていた東京電力の社員の妻から得たのである。

ヨシはそれを聞いたとき、すぐに糸屑をふきとばしたときの君枝の姿を思い出した。あの日は、もう彼女の母親の回復は望み得ないまでに、悪化していたにちがいない。ヨシは、遠くから君枝の少しも動揺をみせていない喪服姿を見やりながら、あまりかたくなになって不幸な人に対するのは止めようと思った。

葬式はおわって、また静かな日々が続いた。今度は、君枝はひとりである。ヨシもひとりである。隣り合って一人ずつが住む、という類似に、ヨシは以前より君枝に関心を持つようになった。

何かふとした機会に、低い垣根の向こうに目をやることもある。夜は、明りがついていれば、かならず君枝がいる。まっくらなら、もうねむっているか、まだ帰ってきていないかのどちらかだ。

あるときヨシは、そこで、君枝のほうはどうか、と思った。君枝がヨシの身を案じて、ときどきは明りがついていのかどうか、確かめてくれることがあるだろうか。

君枝は、もちろんそんなことをしてくれっこない。答えは簡単で、疑いをさしはさむ余地はなかった。

しかし、もししてくれているとしたら、そのときは、ヨシと同じように、明りの有無のことを思うだろう。ふたりが、思い合っているという構図を、一瞬頭に浮かべ、すぐに止めた。

<明りがついていなかったら、君枝の場合は、いないか、眠っているかのどっちかしかない。しかしわたしは違うよ。明りがついてなくなると、目をあけてずっと起きてることが、いくらもある。でもあの君枝には、そんなこと、わかりっこない>

そしてまた隣家を見ると、細い月は出たのに、まだ家はまっくらい影のままなのだった。

月が変わり、ヨシは七十になった。長女の和子が、うまく育ててくれていたら四十八

の年女ということになるわけである。男の子はみんな勝手なところに飛び出していってしまうから、つまらないものである。その点女の子はいい。近くにいてくれたらほんとうに心強い。これからの人生のことを思うと、女の子を育てそこなったのは残念のきわみだ。

裕司の長女のことが頭に浮かぶ。利発そうな子だった。もう小学校の最上級生になるようだが、中学から葉山でというのはどうだろうか。あの家は、こどもはうるさいほどいるんだから。

君枝は、横須賀のデパートに相変わらず通っているが、近所のこどもたちの噂では、もう売り場にはでていないということである。このごろは女性でも重役になれる時代だが、君枝が昇進しているというニュースは、どこからも伝わってこない。どんな仕事をしているかと思う。ヨシは、葬式のおくやみ以降、君枝と口を利いたことはない。

次に君枝のことをきいたのは、翌年の秋である。ひさしぶりに、髪を染めてもらうために、風早橋前のヘア・サロンに行ったのだったが、ヨシを担当した若い美容師に、仲間のひとりがこういていたのを小耳にはさんだのである。

「だから、もう来れないわよ。賭けようか」

「来れないかもね」

「でも、わかんないね。どうして、もっと早く行かなかったんだろう」

「こわかったんでしょ」

「それじゃ、ますますこわくなるばかりじゃない。わたしなら、すぐ行っちゃう」

「早く行ったって、ぜーんぶペローンととられちゃう。そんなのいや」

ヨシは、思わず口をはさんだ。

「だれか、手術するの」

「何時も来るお客さん。今さっき帰ったの」

ヨシの美容師はいった。

「それが胸なんだけれど、これから入院なんで、その前に髪をさっぱりして行きたいって」

「たいへんね」

「まだそんな年じゃないのに」

「そう」

話はそこでとぎれ、ヨシは家に帰ったが、そのときは不幸な女がいる、と思っただけだった。

ところが、それからいく日かたって、このところずっと隣家に明りがつかないことに気づいた。君枝はあきらかに帰宅していない。

彼女の人生に何か起こった。もしかすると男ができて、そっちへ行って暮らしているのかもしれない。

とうとう君枝がうまいことやったのか。

そうではなかった。ヨシが、〈ボン・ジュール〉というパン屋へはいると、そこに東京電力の社員の妻がいて、ヨシの顔を見ると寄ってきた。ヨシは、沖縄の息子の繁栄を、仕送りが増えたことで自慢したり、現地直送のハイビスカスを挿し木にしてみたこと、沖縄では、不美人のことをふざけて〈ハイビスカス〉ということなどを披露した。

東電社員の妻は、感心したような顔をして年長者の話を聞いていたが、一段落すると待ち兼ねていたようにいいだした。

「安原さんは、やっぱり、そうは保たないみたいですよ」

突然の言葉に打たれたヨシは、はっとしてこぶしを握りしめた。一瞬のうちに、東電社員の妻の一言が、ヘア・サロンの美容師の言葉と結びついたのである。あり得ることだ

った。ヨシは、落ち着いた声でいった。

「なんか、胸なんですって?わたし、ちょっと聞いただけで、何も知らないんですけれど」

「ああ、そうなんですか」

東電社員の妻は、勢い込んでいった。それで、知っているかぎりのことを、話し出した。

君枝のことに一番くわしかったのは、洋装店の女主人である。君枝は顔見知りという程度の客だったが、その日、店の品物を見ているうちに気分が悪くなり、置かれていた椅子に腰をかけさせてもらったのが、ことが明らかになるきっかけだった。たまたま、女主人の夫が、地域の民生委員だったことも好都合だった。なにしろ君枝の顔色といい、全体のやつれぐあいといい、ただならないものがあったからである。

女主人は、君枝をととてもやさしく扱い、状態が落ち着くまでそばについていて、手をじっと握っていてくれた。これは、彼女がキリスト教の信者であったこととも関係する。そのやさしさを感じるものがあったのか、君枝は、もうだいぶ前から乳房に堅いしこりができていて不安であること、このごろはそれが痛んで耐えられないほどの日があることなどを、ぽつりぽつりと話だした。

「すぐに病院へ行くことを勧められたわけですがけれど、自分でも、もう行かなければならない時期、とわかっていたみたいですよ」

「行かなければならない時期って」

「つまり、ひとりで秘密にしていられない時期っていうか」

「ああそう」

「あたしのところへも来ましたのよ。〈奥さん。わたし、昨夜ずっと泣いてたの〉って、笑っていったわ」

「痛みがくるようじゃ、だいぶ遅いんじゃない」

「ええ、医者が見て溜め息をついたそうよ。今時、早ければ悪くても相当がんばれるのに」

君枝は、横須賀の市民病院に入院したが、手術をしたという説と、しなかったという説がある。ヨシにはどっちが正しいかわからない。

はっきりしていることは、君枝は四十四歳で、それから間もなくなくなったということだ。今まで見たこともなかった人々があらわれて、ごく地味な葬式が営まれた。町内会は、みんなからのものをまとめた香典をだした。

ヨシは、わたしにはとうとう一言も打ち明けてくれないでいってしまったが、それは隣同士だったせいなのだろうか、と考えながら、お焼香をした。

隣家は空き家になった。

ヨシは、ヨシらしい毎日を過ごしている。テレビの男子バレーボールの大学対抗戦は、やっぱり見逃せない。冬を越すのがつらいハイビスカスのことも、考えてやらなければならない。このごろは、内緒で煙草を吸っている。内緒といっても、だれがみているわけではないのだが、それでも身内に叱られないように気をつけている気分が楽しい。沖繩の息子からは、ひさしぶりで手紙の返事がきた。長女を中学から葉山へよこしたらどうか、という提案に対する断りの手紙だった。

「それがどうも、ボーイフレンドの関係で、その気になれないらしいんです」

そう書かれていたが、小学六年の子に、そんな確固としたボーイフレンドがいるものだろうか。ヨシには、信じられない話だが、もしかすると今の子はそうなのかもしれない。

やっぱり自分の娘でなくては駄目だ。アルバムから引き剥がした長女・和子の写真を

ながめながら、しみじみと思う。

和子が死んだときは、まだヨシは若かった。終戦直後のめちゃくちゃな生活だったが、あの頃はまだ耳は、今と違って遠くはなかった。平塚の長屋住まいだったが、ハモニカ長屋の一番向こうの端の家の夫婦喧嘩の内容が聞き取れるくらいだった。けれども、和子の災難は、耳がよくても不意にやってきたし、守ってやることなんか出来はしなかった。

幼稚園から帰ってきた和子は、はじめは何がなんだかわからなかった。高熱があることだけがわかることだったが、そんなことは素人だってわかる。

かかりつけの工藤という医者は「十分水分をとらせて、寝かしときんさい」といっただけだった。あの藪井竹庵め。それが突然おかしくなって、大病院へかつぎこんだときは完全な髄膜炎で、なにしろ、あの時代のことだ。どうしようもなかった。

いったい、和子のちいさな頭に、どこからそんな悪い菌がはいりこんだのか。わかりやあしないよ。そんなこと。

「あれは、幼稚園が悪かった」

ヨシはそう思うことにして、それからあとの二人は、幼稚園に行かせなかったけれど  
...

ヨシは、剥がしたままになっていた和子の写真をハترون紙の封筒にいれた。封をきっちり折りながら、明日、知り合いの現像請負店の若い人のところへ持って行って、複写してもらおう、そして、関わりのある人間に配っておこうと思った。

空き家になった隣家は、とりこわしがはじまった。相続者が売り飛ばしたのだ。とりこわしなどは簡単で、あっというまに古材木の山になった。ゆきが毎日の雑巾掛けを欠かさなかったのに、こわれるときは、土ぼこりがいっぱい舞い上がる。ヨシの玄関ホールと同じ模様の壁紙ももう使命を終えて、材木のかたち裂けた。

やがて整地されると、きれいな平らになった。夜になると少し欠けた月が、その上に出た。

ヨシは、沖縄の孫娘のところへ手紙を書いた。

<ボーイフレンドがいるなんて、おばあちゃん、うらやましいですよ。どうか元気で勉強してください。ハイビスカスのように明るくきれいになってください。このあいだテレビで、ヤンバルクイナが動いているところを見ました>

あいだに千円札を五枚はさんでやった。

それから、万年床の敷いてある部屋へはいり、ゆっくりからだを横たわらせた。そして、いい音楽が聞こえてくるのを待つように、目を閉じた。